

だから悪魔の子だって言ってるだろ

四ヶ谷波浪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

冒険の書が作られるごとにループする勇者の話。特に何も考えていない話。

目次

だから悪魔の子だって言ってるだろ

だから悪魔の子だって言ってるだろ

「疲れた。そうだ、僕は悪魔の子なんだ」

そういつものように宣言したイレブンは、キャンプ地からいきなりルーラをぶちかまそうとする。オレは周りに目配せすると、飛び立つ寸前のイレブンになんとか触れてルーラに巻き込まれることに成功した。

シルビア曰く、明日までに帰ってきたさいよ、と。まあイレブンの機嫌次第なんだが、母親かよ。

イレブンはたまに、なんつか、やけを起こす。こんなふうにな。オレが付いてきたことに気づいていてもどうでもいいらしいイレブンは、旅人のフードをしつかり被り、兵士どもからは顔が見えないようにするとおもむろに表通りにほど近い民家に入った。あわてて追いかけると、もう既に時は遅し。

ガチャン。

また始まった。普段は温厚かつ穏やかなイレブンの悪癖だ。今日は特に気が立っているらしく、タルを持ち上げて壊すことさえない。足で思いつき蹴り壊し、中に入っていたゴールドを拾っている。

ツボ、タル、タンス、宝箱。これらを見ると元盗賊のオレさえもおののく勢いで奴は窃盗する。目の前に家主がいようと関係ない。おばあさんの目の前で彼女のタンスを漁り、ガーターベルトを盗んだ時はちよつと勇者の定義について大樹に問い合せたかったぐらいだ。

ま、普段はちよつとおとぼけで可愛いところもあるし、何もなきやあ頼もしい勇者様なんだが。人の苦難を見過ごせず、人々を当たり前のように救う。だというのにせっかく助けた人間の家に押し入るとカボチャを蹴散らしながら金品を奪う。恩人の蛮行に声も出ない哀れな人を沢山見てきた。

そんなことしなくなつて金にも装備にも困っていないってのにな。なにせ、イレブンは戦う時だつて誰よりも強い。そう生まれついているかのように。金に困つたなら魔物を狩ればいいだけで、事実豪邸を建てられるくらいは既に稼いである。

そして変なところでめんどくさがりやで、凝り性で、物を大切にしながら、一方でぞんざいに扱う。その「変なところ」の最たるものといえば、二人旅の時だ。あのグレイグ將軍を正面から倒し、デルカダール兵どもを蹴散らしてからどうとうたる闊歩で旅の扉に入ってしまったくらいだ。

曰く、そのまま振り切って走ったらオレがやったフードが飛ぶと思っただらしい。そんなボロきれのために大国の將軍を蹴散らすなよ。ますます悪名高くなるじゃねえか。そのフードは未だに旅人のフードとしてイレブンがつけている。誰かさんのせいで悪魔の子探索がますます激化しているから、それなりに役に立っている。

パリン。パリン。

高い破壊音はツボの悲鳴だ。見なくてもわかる、ガサガサと漁つてから、ちよつとガツツポーズをしているのもな。おおかた小さなメダルでも拾ったんだろう。家主は可哀想に、何が起こったのかも理解出来ずにオロオロとしている。おい、オレの方に助けを求めな。明らかにイレブンの仲間だろうが。

イレブンは何も言われなかったために事が済むとその爽やかな笑顔を見せながら何もなかったと言わんばかりに家主に話しかけ、家主は混乱し、世間話を少々してから絆されて、通報されることなく終わる。まったく人たらしなことだ。

なあにがちよつとツボ、タル、タンスをみたら漁りたくなってしまふ、だ。明らかにオレにはストレス発散か、悪魔の子と呼ばれたことへの当てつけに見える。一度請求書を立ち去る寸前の町で貰ったのをデルカダールに送り付けていたな？ 名目はそう……名譽毀損で。

間違っていない。何も間違っちゃあいない。立ち去る前だから行方を知られることもねえ。なんなら他人に請求書を書かせてたから筆跡すらバレることはねえ。えげつねえな。

「今日も派手にやったな」

「僕は悪魔の子だからね」

「はいはい、小悪魔だな。オレでもあんな大胆な方法は思いつかないぜ」

なんとなく機嫌が悪い。情緒不安定なイレブンに首をすくめた。良くあることだ。

この勇者様は知らないことは何も無い。初めて来るところだろうに道を知っていたりする。なんならオレの贖罪を知っていても驚かない。魔物なんてひとひねりだ。だがそれでも俺たちは普段はぼんやりしていることも多いイレブンを一人にすることだけは絶対にあってはならないと、心のどこかが言うものだから、それに従っている。

知らないことが何もないとはどんな気分だろうな。だからこそ機嫌が悪くなれば普通の方法では発散できないのかもしれない。だからって……おお勇者よ、民家に押し入るなんて！　これが勇者行爲ってやつか。

あらゆる意味で一人にしておけないイレブンは、誰と何をしていようが、諦めきった濁った目をしている。間違いなくこの強い勇者様は世界を救える、もしたった一人で戦ったとしても。

その確信があるというのに、一人にしておくとしてもなく後悔する。心が叫ぶ理由はわからないが。その謎めいた確信があつて、オレたちはイレブンの行動すべてを咎めなかった。

ただ、濁ったとは言つてもそれは疲れた、という方が正しいかもしれない。成人したての十六歳、幼さの残る顔つきとは反対に何をするにしても疲れきっているように見える。疲れた、も口癖だ。

なんとなく、仕方ねえなつて感じた。もう許してやってくれとも思う。何に対してかはわからないが、もういいだろ。許してやってくれ。もう、解放してやればいいのに。

「カミュなら窓から侵入して部屋を荒らすことなく根こそぎもらつていきそうだね？」

「……いや、多分想像しているほど鮮やかな犯行は出来ねえから」

「本当？　ちよつと盗んでほしいものがあつたのに残念だな」

「おいおい……」

それは物騒なことだ。冗談には思えない重い口調だったが流す。オレは何も聞いちやいない。イレブンはすぐに興味を失つて、オレの

腕をむんずと掴むと仲間たちのところへルーラした。

イレブンは、オレに全くの遠慮がねえ。最初から。オレも、ないけどな。疲れた疲れたと言いなながら、飽きた飽きたと口ずさみ、それでもオレが隣にいれば振り払わないし、つるんでいる。相棒ってこんなものらしい。居心地は良い。

「あーあ、疲れた」

「おつかれさん」

「うーん、カミュも自覚がないだけで疲れてるんじゃない？明日は宿に泊まろう、うん」

勝手に自己完結し、イレブンは仲間たちがあわてて荷物をまとめるのを手伝った。出発するらしい。相手を思いやるように思いやる手間さえ惜しむ。よく分からない。荷物をまとめるのは手伝うのに、先は急がない。

曰く、いくら引き伸ばしても、十七歳になる前なら問題はないらしい。一年なにも収穫もなしにさ迷う気かお前は。

飽きたら進むとも言っていた。既に飽きているだろうに。

だが、オレたちはそんなイレブんに仕方ないなとしか思わない。そうなっても仕方がないからだ。

この眩しい夏の日差しを、太陽のようなお前とオレは何度も見た気がする。おかしいな。オレも疲れてるんだろう。なにせ、イレブンは間違っても太陽じゃない。

在りし日の光に輝くお前は月だ。

もう何周目か覚えてない。みんながあと一押しで思い出すようになってからもかなり経っている気がする。もはや、敵対しているときのグレイグでさえちよつと一言二言言葉をかけるだけで思い出してくれる。しないけど。したってどうせやることは変わらないんだもの。

まあ、ベロニカが毎回死ぬのもなんだから、いつも時渡りを省略し

てるけど。だってしなくたって同じなんだよ？ みんなには何もしなくてもかつての既視感があつてさ。魔王の剣がない？ もうその辺りはベテラン勇者だし、剣がなくなつたってホメロスの闇パワーに負けないよ。

僕は繰り返し返す。勇者の旅を。ロトとして、何回も。そりやまた闇に包まれたときは何とかするって聖竜に言つたけどさ。こういう意味だなんて知らなかつたよ。僕は繰り返し返す、繰り返し返す、誰かが僕の物語を読むごとに、冒険を繰り返し返す。

さしずめ僕は本の中の人物なのさ。役からは逃れられず、逸脱したことをやったとしてもその地点に戻されるだけ。僕はもう飽きたし、世界は救えども救えども元通りさ。

でもやめることもできないから、世界はどれくらいの違いまで許容するのか試しているところ。窃盗すら「勇者行為」の範疇に入れるとはなかなかだよ。でも、きつと強盗なら僕はリスポーン地点に戻されるんだろうね。

戻されるとしばらく、完全に最初をなぞらされ、自由に動けなくなるから見極めは大事なのさ。なにせ、ラムダの近くでそんなことになつてごらん、世界は崩壊するよ。そしていくら暴れたつて、「勇者は世界が崩壊してしまった罪悪感からしばらく、自暴自棄になつたのでした」とかいう筋書きで、僕をしばらく縛り付けて軌道修正で終わり。

ああもう疲れた。

みんなが変わらず温かいのだけが救い。おじいちゃんがムフフ本が好きなのも、マルティナがお母さんのリボンを気に入っているのも、シルビアが世界中の人を笑顔にしたいのも、セーニヤが甘いものをたくさん食べたいって思っていることも、ベロニカがセーニヤのことをだれよりも信じていることも、カミュが僕の相棒であることも、何も変わらない。

嬉しいな。すごく、うれしいな。

僕はもう疲れたんだ。前みたいになつてすぐ前を向いて、笑えやしない。何度も何度も繰り返し返して、僕はとうとう開き直つた。

僕は悪魔の子だよ。そうだろう、自分の人生は、どれくらいまで「許



される」のか試して遊んでいるんだから。

でも、そうだね、みんなが僕が勇者であることを望むのなら……か  
つてのようにはなれないけれど、勇者として、あり続けよう。